

新学術領域研究事業「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて：
関係性中心の融合型人文社会科学の確立」

2016年度 第二回総括班会議

議事録

日時：2016年11月27日（日）10:00～17:00

場所：東京外国語大学本郷サテライト5階セミナー室

出席者：五十嵐、石戸、酒井、高垣、松永、山尾（以上総括班メンバー）

渥美、池田、岩坂、遠藤、落合、久保、中山、福田、増原、松本、水島、山本、横田（以上分担者）
領域研究者計19名

有村、石田（慎）（以上学術調査官）

押尾、幸加木、小林、白谷（特任研究員）

欠席者：石田（憲）、井上、帯谷、佐川、末近、鈴木（絢女）、鈴木（恵美）、畑佐、丸山

10:00-12:00 第二回総括班会議

議事次第

報告事項

1. 領域代表者・酒井啓子による挨拶

2. 文部科学省学術調査官からの挨拶、および新学術領域研究事業の説明（有村俊秀氏 [早稲田大学政治経済学術院・教授]、石田慎一郎氏 [首都大学東京・人文科学研究科・准教授]）

・配布資料「新学術領域研究の位置づけと本領域の今後のイベント」に基づき、新学術領域事業の遂行に当たっての留意事項が説明され、特に、他の科研事業と異なり、新たな学術領域を確立するという明確な目的を持っていることに自覚的であるべきである点、分担者がバラバラの研究を行い、個別の業績ばかり積み上げて全体の統一感がないことを避けなければならない点、領域全体として、一定方向に向けてともに研究を推進している点が重要である、との指摘が強調された。本領域の成否は、人文社会科学分野の新領域研究の存続を左右するほど重大である、とも指摘がなされた。

3. 領域代表者・計画研究代表者による28年度の活動の報告・今後の予定

総括班、および各計画研究代表者より、現時点での活動報告がなされた。

①総括班・国際活動支援班の活動報告として、酒井領域代表より、千葉大に特任研究員7人を配置したこと、総括班評価者として3人（長沢栄治 [東京大学]、家田修 [北海道大学]、武内進一 [日本貿易振興機構アジア経済研究所]）が決定したことが報告された。

②計画研究A01の活動報告として、松永代表より、2017年2月17日に国際シンポジウム「Imaging an Alternative “Post-Secular” State: Historicizing and Comparing National Struggles over Re-secularization」をイラン・トルコ・パキスタンの研究者を交えて開催予定であること、翌2月18日には、共催相手のNIHU「現代中東地域研究」東京外国語大学AA研拠点の「20世紀以前の中東における国家・シャリーア関係」ワークショップを開催予定であることが報告された。

③計画研究A02の活動報告として、石戸代表より、11月19日、国際会議「ASEANの統合と開発：メコン川とミャンマーから考える」が開催されたこと、同会議の成果報告書を作成予定であることが報告された。

④計画研究B01の活動報告として、酒井代表より、10月26日、ワークショップ「Situation of refugees and their search for co-existence in the host countries I & II」を開催したこと、千葉大看護学研究科の伊藤氏（グローバルリーディングプロジェクト）との共催で、紛争・難民支援実務家の招聘・講演を連続で実施中であ

ることが報告された。

⑤計画研究 B02 の活動報告として、末近代表に代わり、久保分担者より、9月24-25日に第6回日本・イラク学術合同ワークショップを共催したこと、また、12月10日には国際シンポジウム「中国の国際紛争における新たな役割と行動一不介入原則への発展的取り組み」を、2017年1月7日にはシンポジウム「イスラーム主義運動は中東政治に何をもたらしたのか：民主化・独裁・内戦」を共催予定であることが報告された。また世論調査の実施が B02 の大きな柱となるが、研究計画を超えた交流を積極的に進める予定であることが示された。

⑥計画研究 B03 の活動報告として、五十嵐代表より、11月19日、国際シンポジウム「ASEANの統合と開発：メコン川とミャンマーから考える」を A02 班および千葉大学リーディング研究育成プログラム「未来型公正社会研究」と合同で開催したこと、今後人文・社会・生態科学など幅広い分野の領域横断的な研究を行う予定であることが報告された。

以上の報告ののち、研究代表、分担者、学術調査官の間で議論、意見交換がなされた。特に理論・方法論追究チームの設置の必要性が指摘され、総括班のオンラインジャーナル編集委員会（松永・五十嵐）および久保、酒井が核となり、理論構築を進めるべきであることが指摘された。また、情報共有の手段を開発する必要性が指摘された。

また、若手研究者の育成について、公募研究だけでなく、それ以外にも若手研究者が報告出来る場を作ることの必要性が指摘された。

審議事項

①シンガポール大での国際会議のパネルについて

2017年度について、シンガポール大学中東研究所と合同で移民・難民・多文化共生とのテーマで、国際会議を開催していく予定を審議し、了解を得た。

②2018年度以降の国際会議・対外共同研究予定について

合同相手候補として、ロンドン大学 SOAS と、セルビアの社会科学研究院が候補として挙げられ、末近、久保が中心に協議していくこととした。

③若手研究者報告会の実施予定について

特任研究員や各計画研究で関連する若手研究者に対する育成のための研究会を推進することとした。

④オンラインジャーナル、ワーキングペーパーについて

オンラインジャーナル編集チームを拡充する形で、既存研究レビューと新しい研究の発掘を目的とするオンラインジャーナル設立準備委員会を作り、理論構築チームを加えて、まずは新領域の方向性を示した論文をオンラインで発表することが重要である、との指摘があり、2017年度内に発表できるよう準備を進めることが決定された。

⑤来年度学会年次大会などでのパネル計画などについて

来年度の関連学会で「グローバル関係学」の理論構築に寄与する部会企画を提案し、類似テーマを研究する研究者からのコメントを受けられるような枠組みを作っていくことが指摘された。

以上の総括班会議の後、第一回全体会議が開催され、分担者と代表者の間で、「グローバル関係学」に関する各自の研究方針、認識について、意見が交わされた。

(了)